

1 「平泉とロゴマーク」(平成21年度) / 2 「平泉と金色堂覆堂」(22年度) / 3 「絆」(23年度) / 4 「馬上の義経」(24年度) / 5 「芭蕉と曾良」(25年度) / 6 「弁慶」(26年度) / 7 ライス・アートの制作作業に使う道具一式(測量器具、杭、色付きビニールテープ) / 8 作成した図面を基に測量し、杭打ちをする / 9 杭打ち後は絵柄の区域が混ざらないようにビニールテープを張る / 10 広大な田んぼをキャンパスに絵柄を描く / 11 橋上で美しく見えるように図面には遠近法を用いる

7年間の軌跡

夏場、高館橋長島側の目の前のほ場には、「静御前と義経」の姿、その中央には「平泉」の文字がきれいに浮かび上がり、県内外からの大勢の来訪者でにぎわいました。

町でライス・アートが始まったのは平成21年。農事組合法人アグリ平泉(佐々木正代表理事)が主催となり、田植えから稲刈りまでの間、楽しみながら稲の生長を見られるように、1畝の大規模ほ場に「平泉」の文字と「平泉

の文化遺産のロゴマーク」の絵柄を、色の異なる2色の稲(緑色のどんぴしやり、紫色の古代米)で描きました。誰も経験のないゼロからの挑戦でしたが、7月には見事、巨大画を水田に浮かび上がらせることに成功しました。

4回目以降は文字だけでなく、より複雑な絵柄にも挑戦。そして芸術性の高まりとともに、使用する稲も徐々に増えていき、7回目の現在では色鮮やかな5色(緑色、紫色、黄色、白色、赤色)となるなど、まさに「アート」と呼ぶに相応しいものとなりました。

アート制作現場

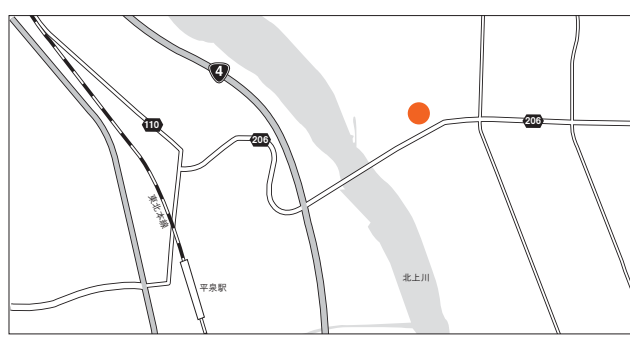
ライス・アートの全体デザインの構想を練り始めるのは、前年の秋ごろから。翌4月には決定し、次は絵柄の色に合わせて稲の品種を選んでいきます。

5月に入ると田を整えて水を張り、いよいよ制作を開始します。あらかじめ田植えをしたほ場内に、絵柄の縁取り枠を設置していきます。この際美しい絵に仕上がるよう遠近法を用いた構図に沿って、測量しながら目印となる約2500本もの杭を

5日間かけて田の中に打っていきます。そして区域が混ざらないように、杭に色付きテープを張り、区画割りをします。

区画割りが終わったら、枠内の苗を4色の有色米の苗に植え替える作業を体験参加者ら約200人とともにを行います。

7月初旬になると、稲が育ち絵がはっきりと現れてきます。しかしまだ気は抜けません。「見える田んぼ」を継続させるため、夏場は除草作業に汗を流します。こうして多くの努力の末に、壮大なライス・アートは少しずつ完成していくのです。



「ライス・アート in ひらいずみ」の開催場所

【特集】大空の下の芸術

—ライス・アートinひらいずみ—

雄大な田園風景に広がる壮大な作品
その作品に込められた思いとは—

水田をキャンパスに見立て、稲の葉や穂の色の違いを利用して巨大な絵を描く田んぼアート。平成5年に青森県田舎館村が村おこしの一環として始めたのをきっかけに、日本全国に広がりました。

当町においても、21年から農事組合法人アグリ平泉が主催となり、田んぼアートに取り組んでいます。第7回目となる本年度は、扇を手に舞う静御前と笛を吹く義経に挑戦し、通りかかる人の目を楽しませました。

今回の特集では、ライス・アート(田んぼアート)にスポットを当て、制作に取り組む思いを取材しました。



写真:第7回作品「静御前と義経」(平成27年7月7日撮影)